



さまざまな生物が生息する良好な自然環境をできるだけ保全していこうという考えは、今日では多くの人々から支持されるようになり、そのための方法も着実に進歩してきています。個々の開発や再開発の現場でも、生物の生息地（ビオトープ）を確保しようという配慮がなされたり、また一部の自治体では、地域の緑環境全体をよい状態に保つための基本計画が策定されるようになっていきます。このような実践のバックボーンとなる学問分野とし

て、保全生物学や景観生態学といった分野が、昨今、大きく発展しつつあります。これらの分野は、独立した新たな専門分野ではなく、生態学的な視点をコアとして既存のさまざまな学問分野を再編成した新領域といえるもので、生物の多様性を保全したり地域に良好な景観を創生していくための一大総合科学ともいえる領域です。関連する旧来の学問分野としては、生物学（生態学、分類学、進化学など）、地理学、林学、造園学などが中心となっていますが、環境法学や環境経済学など、社会科学の多くの分野も関わっています。

植物集団の分布を基本に環境問題への応用も

さて、私が専門としている植生地理学は、地理学と生態学の境界に位置し、植物集団の分布とその成因を追求する分野です。私自身はおもに、日本の照葉樹林帯（シイ・カシ・ツバキなどの常緑広葉樹が生育する一帯）において、自然林や

照葉樹林となつているためです。こうした植物集団の分布にみられる規則性や成因を、気候や地形などの環境要因も含めて追求していきます。例えば、南伊豆地域では、照葉樹の雑木林は、谷筋や北斜面・東斜面より、尾根筋や南斜面・西斜面に偏つて出現しており、これは冬季を通しての気温条件と関連しています。

このような知識の集積が基礎学としての植生地理学を構成しているのですが、同時にこのような知見は、前述の保全生物学や景観生態学の知見としても再構成されていきます。植物集団の分布についての基礎知識が、動物生態などの他分野の知見とともに再構成されて、自然保護および緑地の管理・再生計画の策定といった応用の場においても活用されていくわけです。

先の例では谷筋や北斜面に成立している照葉樹林はそれだけ希少なので、希少な動物の生息場所となっている可能性が高いということになります。こうした観点からの研究や実践を、今後ますます発展させていこうと考えています。

【略歴】いそがい・たつひろは専門は植生地理学とその応用。担当科目は、生物地理学、地理学演習、生物学、環境問題など。著書に『丘陵地の自然環境』等。博士（農学）。39歳。